

# 朗 誦

## 山 本 三 郎

わたくしは昭和十九年（一九四四）四月、東京の都立五  
中に入学した。受持ちの先生は、入学式のあと、生徒が教  
室で緊張して待っていると敷居を大きく跨いで入ってこら  
れた。そして開口一番、「わたしの名前はタニ カナエ」  
といわれ、黒板に端正な文字で「谷 鼎」と書き、「わた  
しの氏名は左右対象だよ、珍しいよ」といわれた。なるほ  
ど五十一名のクラスのなかで該当者は一名しかいなかった。  
中肉中背でさほど身の丈は高くなく、クラスのノッポの  
生徒よりも低かった。油気のない黒髪を七三に分け、始終、  
右の臉をパチパチと瞬かれるので、生徒の方がびっくりす  
ると同時に疲れもした。「真似してはいけないよ、わたし  
のように癖になるから」と注意されていた。

先生は国語担任だったので、国語の授業はともきびし  
く、よく辞書をひいて予習していかないと、指名されて立  
ち往生することがあった。初めての授業に次の万葉集巻三  
の山部宿彌赤人の「不盡の高嶺」を詳しく説明された。

### 長 歌

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き駿河なる

富士の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば 渡る日の 影も  
かくろひ 照る月の光も見えず 白雲もい行きはばかり  
時じくぞ雪は降りける 語りつぎ 言ひつぎ行かむ 富士  
の高嶺は

### 反 歌

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ  
富士の高嶺に雪は降りける

この長歌と反歌は赤人が富士山を望んで詠んだもので、  
入学時の国定国語教科書「中等国文一」の冒頭の一節であ  
る。

わたしはどうしてか、冬の富士山を眺めるとこの赤人の  
長歌と反歌が口をついて自然と出てくる。反射的に唇が動  
いているのだ。特に冬の朝、下りの東海道新幹線で富士駅  
の手前から富士川の鉄橋を渡るまでの一、二分の間、右側  
の車窓に裾野まで白一色の富士山を望むと、いつも長歌を  
無意識に口ずさんでる自分に気付いてびっくりする。

なぜだろうか、と永年考えていたが、最近やっとその理  
由がわかった。谷先生は、国語の教師であると同時に、万  
葉集や古今・新古今和歌集にも精通しておられた有名な歌  
人で、後年には近代詩歌社という結社を自ら結成、「近代  
詩歌」を創刊されたほどであった。そのためか、先生は入  
学早々のわれわれに、「暗記、暗誦は必ずしも悪いもので

はない、いつか必ず役にたつ時がある」といわれて、この赤人の長歌を暗誦させ、授業の初めに次々と指名された。わたくしも自席で起立して暗誦したものだ。

このためなのだろう。「……白雲もい行きはばかり、時じくぞ雪は降りける……」の件は、雪の富士山を眺めるたびに口をついて出てくる。もう条件反射になっているのだ。

こんなことなので、いつか冬の田子の浦に行ってみたいと思っていたところ、今冬、宿願を果した。田子の浦港のフェリー発着場のそばに、この赤人の歌詞を万葉仮名で刻んだ記念碑がある。ここから望む万葉時代の富士山の景観はまことに素晴らしいものだったにちがいない、と思わせる恰好の場所である。入江越しに愛鷹山が右にあり、左奥に秀麗な富士山を望むことができる。

この歌は赤人が政府の役人として東国に赴く道すがら、田子の浦から仰ぎ見た富士の姿があまりにも雄大で美しく神秘的であったため、その印象を詠んだというわけで、地元では叙景歌の最高傑作だ、と鼻を高くしている。当日の富士山は、雲ひとつない快晴のもと全山真白で、幾筋の稜線から白煙が上っていた。

万葉時代の雨あがりの冬の朝、旅人が文字通り白砂青松の田子の浦から、一望の原野の果てに聳えつつ富士山を眺めた感動が、この絶唱に昇華したにちがいない。赤人の時代には、林立する製紙工場の煙突や高圧線の鉄塔、轟音をたててひっきりなしに東西に走る新幹線、往来のはげしい

高速道路など、いま、視界を遮っているものは何もなく、ただ潮騒だけが伝わってくる静かな浦曲だったにちがいない。

臉を閉じて往時を思い浮かべると、碧空を背に裾野まで純白の富士山だけが浮かんでくる。再び件の一節を口元で唱えている自分に気付いてハッとした。蓋し少年の日の暗誦が五十数年を経て、念願の地に佇むわが唇に蘇ったのだ。ところで近ごろ、齋藤孝の『声に出して読みたい日本語』がたいへん売れているようだ。これがきっかけとなったのか、日本語に関する類書が多数、書店に並ぶようになった。日本語の暗誦、朗誦にかかわるリズム・テンポ・響きなど、伝統的な文語の面白さを見直す気運がでてきたのかもしれない。

句会では「調べがよくない、目だけで句を作らないで、必ず口に出してみる」と注意を受けている。古くは芭蕉が「舌頭に千転せよ」と説いて調べの良さが俳諧の基本であることを教えている。

俳句は季語と措辞と調べの三拍子を生命とする韻文なので、朗誦性に秀れていなければ赤人の長歌や反歌のように伝承されないであろう。むずかしいが折角努力したいと思っている。

話は谷先生にもどるが、先生の没後四十年を経て全歌集が二年前に上梓され、そのなかに次の短歌を見つけた。

考查場に子が入りてゆくうしろでは

爪立ちて見ぬ何すともなく

あのきびしい先生にも、親としてのこんな情景の一面もあるのかと、びっくりもし、また一層の親しさを感じたものだ。

(平成十四年九月記)

この一文は、私が所属している俳誌『馬酔木』(あしび)に投稿し採用されたものです。

紫水会で姓名が左右対称なのは、青木栄、小林薫、田口一文の三君だけです。

なるほど少ないですね。 小林 三郎